

# オークランド日本人会主催戦後 80 年記念行事での松居総領事開会挨拶 (中村エレン・オークランド大学芸術教育学部上級講師講演会)

8月24日(日)13:00  
オンライン

## 1. 冒頭

皆様、こんにちは。ご紹介に預かりましたNZのオークランドで総領事を務めます松居眞司と申します。戦後80年を迎えた本年、オークランド日本人会主催でこのように講演会が開催されることを大変嬉しく思います。まず黒田尚美会長、そして司会のアングランド恵子さんほか企画サポートされる役員会の皆様に敬意を表します。また本日はNZ国内、日本その他の国からも広く参加いただいていると伺いました。日本人会名誉会長として私からも感謝申し上げます。

ちなみに、私が外務省に入りましたのは平成元年1989年、ちょうどその年にオークランドでは当時の総領事の声かけで、日本語補習校のサポートのため、また横串で知り合い、根を張る苦労や仕事・生活の知恵、母国への思いも交換できる親睦のハブがあったら素晴らしいとの思いが結実し、日本人会が誕生したということですが、私自身出身の京都で人生の伴侶を得た年にも重なるご縁であります。

本日は、後ほどご紹介がありますが、オークランド大学で日本の医療社会史を研究されているご専門の立場から、戦後80年の出発点から今日までの日本人の社会史の光を当て講演していただきます。誠に有難うございます。先生はご研究の傍ら、日本語教育にも携わっておられ、日本に飛び立つ国費留学生選考などにもご尽力いただいております。あらためて感謝申し上げます。

## 2. 戦後80年の個人的振り返り - 三つの視点

さて、この80年をご参加の皆様はそれぞれどのように振り返っておられるでしょうか。私自身は三つの視点を心に留めて先生のご講演を拝聴したいと思います。

### (1) 自分事として

一つ目は戦後日本社会に60年以上生きる自分とその前を生きてきた親の世代の80年ですから何より自分事としての個人的な振り返りです。私だけの経験や思いではないと思いますが、戦後80年の出発点の終戦を乗り越え悠久の命のバトンが繋がり、誰かが守ってくれた未来を今生きることに謙虚に思いを致し、戦後わずか18年後に生まれた自分を食べさせ、しつけ教育し、70年大阪万博で世界に触れさせ、自立させてくれた両親や、90年にわたる生きざまを日記に残してくれた祖母、同時代を励まし合った兄妹には生涯感謝です。その取り巻く社会に目を移すと、日本の高度成長を可能にした日本人の大人の勤勉さやモノづくりと同時に国際社会からの物資や金融支援を受けた恩を忘れない礼節と人々の精神文化が身近にありました。

これは、今日多くの途上国で JICA や草の根支援を通じて先人が築き、世代を越えて語られる日本という信頼ブランドや、NZ と日本で相次いだ 2011 年大震災での助け合いにも通じたものと思います。

## (2) 外交の担い手として

次に二つ目の視点は、外交の担い手の一人としての振り返りです。世界情勢を見極め、国益に基づいて国際益を構想し追求し、日本社会の安全と繁栄を支え、Never give up で最後まで平和の砦となるのが外交の使命であります。

日本は、この 80 年間、「二度と戦争の惨禍を繰り返してはならない」という不戦の誓いを堅持し、平和国家としての道を歩んできました。NZ との間においても、1952 年の外交関係樹立以降、外交関係はもちろんのこと、人と人との交流や貿易投資を通じ、着実に関係を強化してきました。現在、「戦略的協力パートナーシップ」を通じ、二国間の関係のみならず、インド太平洋地域での協力、国際的なアジェンダでの連携も緊密に行われています。

世界は転換期にあり、地政学的緊張や自然災害等のリスクに晒され、不確実性が一層増しています。そのような中、日本と NZ は、インド太平洋地域での法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序を推進していくことが重要です。そのため、総領事館としても、皆様とも協力しながら様々な活動を行って参りたいと思います。

歴史の教訓の中から未来への知恵を学ばなければならない、国際平和と秩序をみだりに脅かす動きを許さない、その決意を私も胸に刻み、分断や憎悪ではなく、互いの良い所を認め合い、支え合える未来に向けて、政治体制や社会、文化、教育の違いについて知らざるを知り合い、互いに学ばざる事実や戦後の取組を学び合い、理解に相違があれば突合せて対話できる関係と、次の世代に理不尽を残さない社会を築こうという視点が重要と考えます。

例えばこのような議論を毎年実践している日米学生会議という取組はご存じでしょうか。この会議を経験した息子夫婦や子々孫々も本日聞いてくれているかもしれませんが、太平洋の平和の礎の信頼を築く一翼を学生同士も担うべく戦前に始まり、来年 90 周年のこの交流が日米双方の社会に与える、他の国との学生交流にも広がるインパクトに期待します。

## (3) 在住日本人社会の総領事として

最後にご講演で重ね合わせたい三点目は、戦後 80 年を NZ の在住日本人社会から見る視点です。総領事として着任して 2 年余り、様々な方からお話を伺うことができました。1872 年に長崎から NZ に渡った野田浅次郎さんが記録に残る最初の日本人と言われますが、子孫は NZ に数多くおられるそうですが、私自身もワイカト・コロマンデルタウンの旅先で遠い親戚ですと名乗る方に遭遇しました。野田さんは戦後を見ずに亡くなられ、戦時中 NZ で日系人として息子さんが収容されたが、戦後お孫さん家族による九州の野田さんのご実家訪問が実現したそうです。また、数十年前に NZ にいらした方々からは、かつての敵国の国民として、当初辛い言葉を投げかけられた経験についてお聞きしたこともございます。皆様の日々のご

尽力が、今日の両国の間の確固たる信頼の根本にあることをあらためて認識する次第です。

ちなみに、アジア NZ 財団による最新調査では、NZ 国民から、アジア地域において、日本は「最も責任ある行動を取ると信頼できる (62% : 1位)」国、また「友好国 (84% : 1位)」として筆頭に上げられ、更に最も「重要な安全保障上のパートナー (57% : 1位)」と認識されています。このような良好な関係の背景には、在留邦人の皆様のご尽力があることを誇りに思い、深く感謝申し上げます。

今日、総領事館は、ニュージーランドの北島で首都ウェリントンの日本大使館の管轄する南部を除く地域全体で約1万2千人、オークランドだけで1万人以上の在留邦人の皆様に、安全安心に役立つ情報や窓口領事サービスをお届けするとともに、日本企業・事業者の皆様のビジネスチャレンジや和食文化の普及、姉妹都市・学校交流、芸術文化・武道はじめスポーツ交流を引き続きサポートしております。日 NZ 間で人と人が次々に生み出すこれらの交流の現場は、私には、平和に徹して国際社会が定めた決まりや作法を尊重し、手に負えない事態や課題の解決にもちつもたれつを実践してきた日本と、非核地帯を維持し平和維持活動に国民が積極的に志願する NZ の両国が歴史に学びながら未来を切り開いてきた平和貢献の証に思えます。

その取組の例として、医療社会の危機に直結して多くの方々の記憶にもまだ新しいのはコロナ禍の NZ 政府の対応とともに関係者にご協力も仰いで在留邦人の皆様にお届けした日本の支援かもしれません。加えて、コロナ収束後に当地に参りました私の経験から当地日本人社会史に刻みたい事例としては、大変喜ばしいことに、昨年、記録の限りでは管内で初めて100歳を迎えられた在留邦人の方に政府よりお祝いをお届けしました。また、本年6月にはマオリ新年マタリキの祝賀に招かれ、スバルの紹介等を通じ日本人とマオリの生活文化交流と親睦が深まりました。更にオークランドには姉妹都市の福岡市と加古川市からそれぞれ寄贈された日本庭園があり、関係者のご尽力で維持され親しまれておりますが、今月終戦の日に、加古川市の先生方と中学生を当地地元議員が日本庭園に迎える草の根交流会に参加させていただき、ともに平和の鐘をつき、広島・長崎の被爆80年の節目に犠牲者への哀悼と平和への誓いを捧げることができました。これからの日本の社会史を創る皆様のご活躍と繋がりを、日本人会や企業関係者の皆様とも連携して引き続き応援・サポートして参ります。

以上、私からのご挨拶とし、中村先生のご紹介とご講演に移りたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。有難うございました。

(了)